



鐵砲百合の栽培とその將來

明 道 博

鐵砲百合という名称は私自身あまり好きではない。しかし本邦では従来このように呼び慣らされてきたし、またこの方が実際上も間違いなくその種類を示すただ一の名稱であるからその名を用いることにする。

だが、とにかくたゞ鐵砲百合と言つたのでは、百合の種類に疎い人には決してあの清浄な香り高い百合を連想することはできないであらう。それほど実物に即しない名である。むしろ白百合と呼んだ方が詩的かも知れないが、白い百合は鐵砲百合の他に數種あるから困る。それらの中には高砂百合をはじめ、マドンナリリー、リーガルリリー、白鹿の子百合など、一般に多量栽培され、また切花として売出されているものがある。

アメリカでは鐵砲百合のことをイースターリリーと呼んでいる。四月の復活祭にこれが大量に消費され、なくてはならない宗教花の一つとなつてゐる。したがつてイースターリリーという名によつて誰しも実物の鐵砲百合を連想せしめ得る点、頗る適當な名稱であると思う。

さて名稱のことで無駄口をたたいたが、この鐵砲百合が、戦前は本邦で栽培された球根を以つて世界中の需要をほとんど満た

してゐた。すなわち日本は世界的に見て鐵砲百合球根の特産地であり、独占的栽培地であり、現在喧しく叫ばれる輸出作物の一つであつたわけである。それが終戦後の現在その輸出が全く行き悩みの状態を続けている。終戦後幾度か輸出を試みたが失敗してしまつた。世界的に見て、鐵砲百合の消費量は戦前より増してはおろが、減つてはいないであらう。それでどうして本邦の球根輸出が振わないのであろうか。

鐵砲百合の生産は、本邦の独占地歩は崩れ、今や世界的自由競争裡でこれを復興させなければならぬ。

私の考えでは、このように輸出が振わない理由には大体三つの点があると思う。第一は球根の質である。第二は価格の点であり、第三は輸出業務というか手續の問題と政治的な解決を要する問題とである。これらについて考えてみよう。

先ず第一の質の点から考えてゆけば、これには品種、罹病の有無、生産地の氣候等が考えられる。本邦が明治中葉から今次大戦に至るまで生産輸出していた品種は、埼玉系の黒軸鐵砲を主体としておつて、これがほとんど八割くらいを占めていた。言うまでもなく、鐵砲百合は球根を秋収穫して

これを冷蔵庫に貯蔵すれば、十月月くらいはほとんど損傷なしに何時でもこれを取り出して、後九〇〜一二〇日の栽培を經過せしめれば開花せしめ得る。

埼玉系黒軸は琉球列島の自生地から採集して来て栽培に移した一系統であつて、球根の貯蔵がよりよくできること、花の形、大きさが秀れていること、花つきのよい点などからして、長い間その王座を譲らなかつた。

一方、主な消費国であるアメリカでは、日本からの輸入を何とか喰ひ止めようという努力がなされてきており、初めは日本から輸入した埼玉系黒軸鐵砲や、エラブ系のものをもつて自国で栽培してみたが、よく生育しなかつた。これは氣候風土の相異、バイラスを始め種々の病害の蔓延などが原因であつた。それから今度は自国に適應する鐵砲百合を品種改良によつて作出しようという方向となり、約五十年前から北部のオレゴン州、ワシントン州あたりで農事試験場を中心にして実生を初めた。言うまでもなく、実生による場合はバイラスは当初から全く無病の状態を以つて出發し得る。したがつて完全な隔離栽培をすれば、バイラス無病球を大量に生産し得るので、品種改良とい

うことと平行して、実生による球根生産並びに実生球を親とする無性繁殖が次第に大々的に行われるようになってきた。これらの実生の中にはもちろん、アメリカの風土に適合し生育が良好であり、かつ形質も前記埼玉系黒軸やエラブ系のものに劣らず、むしろ優つてゐると考えられるものが出てきた。しかし、アメリカの促成業者が久しく日本からの輸入球を取扱ひ慣れていたことと、日本産の球が価格低廉であつたことなどから、アメリカ本国で改良された鐵砲百合の売行きが行き悩んでおつたことは確かである。以上のごとき強みが日本産球根にあつたとはいへ、一方、次第に病球、とくにバイラス罹病球が多くなり、日本側で種々な栽培上の対策を講じていたにもかかわらず、依然としてこの罹病率が下らず、むしろ増加の傾向にあり、これが頻繁な苦情となつて日本へ返つてきた。アメリカとしては、生産費が日本より少々高くなつても、この欠点を突こうと考へていたことは確かであらう。昭和の初期からアメリカ合衆国は、連邦の中央試験場を中心とし各地の農事試験場で鐵砲百合の球根生産並びに促成に関する試験を本気になつてはじめていた。その後間もなく今次大戦となつたわけである。バイラス病の対策としては、隔離栽培、病球採取の絶えざる励行が何より大切である。しかるに、戦争中日本では鐵砲百合はほとんど捨ててしまつた。一方アメリカでは、前述のように宗教花の一つとして用いられ、高価であつたとは言へ、実用花としての色彩が強く、かつ富める国とその需要は戦時中も激減はなく、これに

反し日本からの輸入が停止したために、これまでの素地で自国内生産が急激に上昇した。球根生産者も、指導機関も、過去の苦い経験からバイラス対策は相当慎重に講じたものと考えられる。そして、ともかくにも自国消費をどうやら賄う程度の作付にまでしてしまつた。

戦争が終つた時、いち早くアメリカから百合根の取引に関する問合わせが来ていた。向うでは戦前の安価な日本産球根を夢み、かつ日本には百合根がダブつていようだろうと考えたらしかつた。日本へ視察に来たアメリカ人は、球根が集荷できないので困つていた。アメリカからの引合いに刺戟され、やつと戦前の球根栽培に取りかかろうとして取り残された球根を探し廻つていた。しかし同時に、戦前その八割近くを日本産球根によつて賄つていた主消費国たるアメリカが、自国消費をつぐなうほどに作付けを増していること、さらに在来の埼玉軸よりも秀れていると思われる品種がアメリカでも大量栽培されていることに目を塞ぐわけにはいかなかつた。これはただごとではない、たとえ日本からの球根が安く、品質がよいとしても、直ちにアメリカの生産者がすぐに手を挙げてしまつようなことはあり得ないからである。あまつさえ掻き集めた球根を殖して日本からアメリカへ輸出したものは、戦前にも増してひどいバイラス罹病率を示した。一方、日本における生産費は戦前のように決して安価にならない。しかも日本の国内消費だけでも戦前に優る数量を示している。このことは結局、生産者が病球採取を怠る結果となつてゐる。数年間はこのような非常に悲しい状態が続いてきたが、一昨年あたりから漸く球根の価格も下つて来、無病良質

の球を栽培しなければという考えが相当強くなつてきた。次に、価格の点は言わずも知れたことであつて、現在本邦における物価は国際的に見て大部高いから、この点の解決が必要である。

将来鐵砲百合の栽培はどうあるべきか、また輸出に希望が持てるか

先ず価格の点は、現在の日本にとつて鐵砲百合だけではなく、すべての商品が悩んでいるところであり、将来輸出を以つて国家経済の安定を得ようとする日本には、是か非でも低廉優秀ということを目指とせねばならない。現状にあつても、同じ輸出球根のチューリップは国内価格のほぼ半価を以つて輸出を強行しているから、百合根にしてもこの意気込みが必要である。現在本邦の栽培者も生産指導者も、いかにバイラスの駆逐ということが至難な事業であり、根本的対策が必要欠くべからざることであるかを身をもつて体験している。これは終戦後百合根輸出業者が遭遇した最大の試練であり、輸出先のアメリカが自由生産量の強大なことからその苦情が容赦なく突きつけられるから、戦前並みの困り方ではない。農林省は昭和二十六年度から原種圃制度を採り、他の蔬菜類のバイラス対策に準じて生産体制を採ることになつた。これが順調に進めば、数年にして無病球の生産が軌道に乗るであらう。しかし、これには徹底した検査と隔離を行わなければならない。前述のごとく、終戦後の本邦鐵砲百合栽培は、散在して戦時中放任されていた少数の球根を以つて先ず始められた。始め農林省が考へていたのは、戦前並みの埼玉黒軸鐵砲を主体とした生産であつたが、意外に無病球の少いのが付き、逆

にアメリカから輸入した球の方がほとんど健全であり、形質が秀れているかが知らされた。識者は現在の埼玉黒軸が戦前のそれに比して著しく見劣りするようになったと言つてゐる。無性繁殖を以つて永年栽培される植物では、よく老化ということが問題になるが、これがバイラスと絡んで一応栽培者の眼をして埼玉黒軸を眺めるようにしてしまつた。それほどいじてしまつたのである。それに引き替え、実生による新しい年代のものは隔離栽培を続ける限り伸び伸びとしていて、アメリカからの輸入種がよく見られる原因はここにある。

以上述べ来たことにより、当然品種の吟味が将来の重大課題でなければならぬ。にかかわらず、従来本邦では全く埼玉黒軸に頼つていて、品種改良のよるべき資料がない。アメリカでは恐らく数千系統のリストを試験場で保持しているようである。したがつて終戦後の品種の勝負では明らかに日本の負けである。このため本邦識者の中には、この際クロフト（アメリカで品種改良した鐵砲百合）を輸入して、これを増殖し、逆輸出すべしという意見が相当強くなつて来た。しかし、これを以つて足れりとするならば、永久にアメリカの下請を日本が引受けることになつてしまふ。戦前本邦の栽培者が示した技術と生産費の低廉には、必ず回復の希望が持てると思う。多種類の百合の自生を有し鐵砲百合もまた自国に原生する日本としては、将来品種改良で海外に負けないことと、狭い国土であるから慎重な隔離栽培制度を確立することによつて、必ず立ち直れると確信される。戦前、北海道での鐵砲百合の栽培を試みた者は数多くあつた。ことに第一次歐洲大戰の時ほど相当大量北海道に栽培が試みら

れた。これらは前述の埼玉系黒軸を主体とする品種であつたが、これが見事失敗して皆消えてなくなつた。これは丁度アメリカが日本から輸入した鐵砲百合を栽培しようとして失敗したのと同じ理窟であつて、北海道に適しない品種なのである。アメリカ人はそこで自国に適する系統を得ようとして品種改良を進めたが、北海道の栽培者は簡単に駄目だといふのでやめてしまつた。たんにこれだけの相違である。品種改良を考へなかつたのは北海道人だけではなく日本の栽培者が皆そうであつた。これが一時は輸出花卉の王座を以つて任じた鐵砲百合が一たまりもなくべちゃんになつた最大の原因である。

北海道では北海道に適する品種が改良によつてできる。私自身埼玉黒軸やエラブ系、柳葉系の鐵砲百合を府県から入れて札幌近郊で栽培してみたが、五〜六寸球以上にするには相當の技術を要し簡単でない。しかし実生から得た系統では、二〜三年で一尺球を得ることとして困難ではなく、地上部の生育も頗るよい。

雪印種苗の上野幌育種場を訪れて、北海道であれだけの生育を鐵砲百合が示すものと驚かれた人は少くないであらう。それは従来北海道での栽培が不可能なりと頭から決めてかかつていた人々であつて、知つていたよつて全く鐵砲百合を知らなかつた人々である。同場の百合根は全て実生から出発している。将来その中で北海道に適する系統が無性的に増殖せられるという体制を取る限り、本邦においては最も完璧な隔離された栽培圃とならうし、本邦鉄砲百合根生産の戦後における恰好の新しいケースであらう。

(筆者は北海道大學農学部助教)